

## レイテ島戦記

島根県 勝部 孝吉

私は現役兵として昭和十六年十二月十一日朝鮮第四三部隊に入隊しました。

同年十二月十五日宇品港を出航、十六日釜山に上陸、列車輸送で咸鏡南道咸興に到着し訓練にはいりました。

昭和十七年四月、歩兵第七四連隊に転属し、毎日教育訓練に従事しました。この部隊で特筆することは朝鮮人志願兵が一個中隊に十人の割合で配属されていることでした。それらの人には一般兵と同等の扱いであり、なんら差別されることなく、訓練、勤務にはげみました。

とくに記憶に強く強く残っていることは、独身者よりも妻帯者が多かったことです。その間、元山、虎島、宣徳等の警備について日を通ぐすうち、昭和一九年四月二十九日動員下令、五月十日釜山港を出帆、輸送船団をもってミンダナオ島へ向かい航行する。船団は十一隻で

これを護衛する海軍の砲艦が三隻、敵の潜水艦、空襲等に敵戒態勢をとりながら進んでいった。

途中、マニラのセブ島に寄港して昭和十九年五月二十五日ミンダナオ島スリガオに無血上陸した。航行中、敵の攻撃も受けず事故もなく、上陸作戦は一日で終了した。野砲一個連隊、騎兵一個連隊、歩兵砲、大隊砲等の重火器もすべて無きで揚陸を完了した。

私は上陸後第三大隊に配属され大隊本部付となる。当時の階級は一等兵であった。第三大隊は東海岸のマドリット警備の任につく。

その後、サラングに転進を命じられ陣地構築作業にとりかかるが、そこは一面の棉花島でしかも砂地であるためにスコップで掘ってもくずれやすく大変な苦勞をした。

昭和十九年十二月までサラングの守備に任じた。米軍のレイテ上陸は十月二十日に情報公開され、十九年十二月三十一日サラングを出発二十年一月二十二日マルクト到着、ただその間約四百キロの行程を強行軍するため、背囊等は輜重車に積載して綱をもって数人で引っ張って

行軍した。

敵のカガヤン上陸を想定してマルコからすこし北方になるマンジマに移動して陣地を構築した。四月三十日米軍がコタバトに上陸、北上してきた。カバカンで第一大隊が接敵して激戦をまじえた。我々第三大隊は五月四日第十中隊を残置して第九中隊と第十一中隊、第三中隊、機関銃中隊と北上してくる米軍を迎え撃つため、トラックに分乗、南下してパロマ附近で敵米軍と遭遇、激戦を展開した。この時堀田少佐のひきいる第三大隊は勇戦奮闘して米軍一個中隊を全滅せしめ敵に甚大な損害を与え、全部隊を潰走させた。

以後、十日にわたりこの地を死守したが、負傷続出、食糧欠乏による栄養失調等で戦力を喪失し、ついにささえきれなくなり、フランギ川を渡渉して残存部隊は道なきジャングルに潜入したのであった。その時の第二大隊の残存兵力は十五人ほどであった。すでに食うにしょくなく、苦しむ負傷者を手当する医薬品もなく、朝鮮を出発する時着ていた着たきり雀の軍服はポロポロになり、軍靴はほとんど底が抜けて裸足となり、夢遊病者のよう

な足どりで前者のあとについて行くしかなかった。落後  
は死であるという意識を強くもって、果てしもなくつづ  
くジャングルをただ歩いてゆくだけであった。

途中で幸運にも広大な芋壘をみつけて、その芋を食糧  
として自活生活をしていたが、昭和二十年八月十七日ご  
ろ無線で日本の降伏を傍受した。その後米軍の飛行機が  
ピラを散布し降伏を勧告してきた。

また、九月始めに山下大將が、マニラで降伏文書に調  
印したというラジオ放送をきいたので、日本の降伏は間  
違いない真実であると確信し、九月十二日堀田少佐が残  
存部隊をいんそつしてジャングルをでて米軍に投降し  
た。

その後、捕虜收容所生活にはいるが、マンジマに残置  
した第十中隊は、五月十日上陸した米軍と死闘を繰り返  
したのち全滅し、生還者五、六人という惨たんたる状況  
であった。收容所では朝はお粥といってもお湯のなかに  
米粒が泳いでいるようなもので、とてもまともなもの  
はなかった。昼食はパン一個だけで副食なし、それでも  
我慢しながら、いちずに祖国に帰る日のみを唯一の心の

灯火として耐え抜いた。

昭和二十一年十二月九日、東名古屋港に上陸して復員となった。

後日譚となるが、レイテ島のカバカンで勇戦奮闘して堀田少佐以下第三大隊の部隊が敵一中隊を全滅し多大の損害を与えて潰走せしめた戦闘ぶりに対して、敵である米軍の指揮者が讃辞をおしまなかつたことは特筆すべきことである。

## 鉄兵団バレテ峠の死闘

兵庫県 山下 正雄

―輜重輸卒が兵隊ならばトンボ、蝶々も鳥のうち、と輜重輸卒をやゆされた時代がありました。

そうです。私が入隊した昭和十三年のころまでは輜重輸卒は一人前の兵隊あつかいされませんでした。とくに私がここで申しあげたいのは、昭和十四年から輜重輸卒ではなくて輜重特務兵と呼ぶようになりましたし、一般

兵隊なみにも進級できることになりました。

―山下さんの軍歴のあら筋を教えてください。

私は昭和十三年徴集で第二種合格でした。昭和十三年十二月一日に第一補充兵として(教育召集で)姫路の輜重兵第十連隊に入隊しました。当時は鞍馬、駄馬による弾薬、糧秣、資材の輸送がおもな任務で、同年兵の多くは一か月の教育で召集解除になりましたが、残された者もありました。

私も残された組で翌年三月に教育召集が解除になり帰郷しました。なぜ残されたかといいますと、輜重隊も近い将来には軍用トラック等の自動車による輸送が多くなるというわけで、教育期間が三か月延びたわけです。

昭和十六年七月に関特演動員で二度目の召集を受け、満州のチャムスに行きました。私は昭和十九年七月までチャムスにおりました。捷号作戦発動にともない昭和十九年八月下旬から九月中旬にかけて台湾の基隆に上陸し、第十方面軍隷下にはいりました。師団は、兵庫、岡山、鳥取、の三県を徵募区とする部隊で、兵員の大部分が現役の下士官、兵で充足された。いわゆる「現役師団」